

性の脱中心化と身体の中心化

モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』における
性理論の再考察¹

澤田 哲生

序論

『知覚の現象学』(1945年)の「性的な存在としての身体」(PhP, p. 180-202 / p. 265-285)と題された章で、メルロ＝ポンティは、性的な場面における人間の身体と、その実存構造について論じている。周知のように、ジークムント・フロイトは、性およびそこから生まれる衝動が、青年期以後の生活に限定された特殊な活動ではなく、幼児期にすでに見出される根源的な活動であることを主張している²。フロイトは、性的な衝動のなかで、主体が対象を求めるエネルギーを「リビドー」と呼ぶ。このエネルギーは、最初は、自己の保存に向けられ、次いで、その一部分が外部世界の対象に向かう³。幼児期にこのような形で分節されたエネルギーは、発達を通じて意識下に抑圧され、神経症の病因を構成する。そして、この病因が、個人々人によって程度の差こそあるものの、幼児期以後における主体と外部世界との関係を粗描する。この意味において、性は、フロイトにとって、生殖を媒介とした異性との交渉にとどまらず、人間の諸活動のなかでも最も根源的な活動を指示している。

メルロ＝ポンティは、フロイトの性理論を念頭に置きつつ、当該の章

で議論を展開している。彼は、フロイトの性理論のなかでも、リビドーの水準で形成される主体と外部世界との関係、そして、この水準における身体の役割を重要視する。前者を議論する上で、彼は、ゴルトシュタイン学派のユリウス・シュタインフェルトが作成したシュナイダー(視覚失認を主要な症状とする高次脳機能障害患者)の性生活に関する記録を援用する。後者の役割を明確にする上で、失声に陥った女性の行動を現存在分析という視点から扱ったルートヴィッヒ・ピンスワンガーの論考を援用する。

このように、メルロ＝ポンティは、フロイトが主張する性の根源的な側面から生まれる主体と外部世界との関係、さらには、身体の機能に注目している。本論で詳しく見るように、「性的存在としての身体」の議論が進められるなかで、性は人間の諸活動の中心を離れ、これらの活動を取り巻く「雰囲気」として定義される。そして、性のなかで作動する「身体」の機能が、最終的に、考察の中心に据えられる。「性的存在としての身体」に関しては、すでに数多くの優れた先行研究が存在する。これらの先行研究はメルロ＝ポンティのフロイトに対する立場——現象学の精神分析に対する立場——を重点的に論じている⁴。他方で、メルロ＝ポンティが、どのような視点から、性を脱中心化させ、身体を考察の中心に定位したかという問題に関しては、未だに十分な研究が行われていない。この問題の解明が本研究の目的である。

1

性の脱中心化

1-1 シュナイダーの性生活

「性的機能の分析への寄稿論文」と題された論文のなかで、シュタインフェルトは、ゲルプとゴルトシュタインの患者であるシュナイダーの性生活を、患者とのインタビューを交えて、論じている。シュナイダーは、第一次世界大戦中の東部戦線で、地雷により左側頭部から後頭部を負傷した。傷が癒合した後に、損傷部分からは帰納されない、様々な行動障害を彼は経験することになる⁵。例えば、彼は、他人から命令された極めて単純な身体運動は遂行できないが、生活のなかで習慣化されている運動ならば、労働(彼の場合はマッチを箱につめる作業)のような高次の運動も遂行できる⁶。

この種の行動障害は、彼の性生活においても顕著である。シュタ

¹ 本論で言及される主要な文献の略号は下記の通りである。引用に際して、略号と原文および邦訳のページ数を明記する。性に関する用語の *Sexualité* と *sexe* に関して、「性的な存在としての身体」におけるメルロ＝ポンティは、前者を多用する反面、後者をほとんど使用しない。また、前者に関しては、男性／女性という性差の問題よりも、「性」の水準における対人関係、対象関係、等々の活動面が議論の対象となる。ゆえに、本論では、既訳に倣い、*sexualité* を「性」と訳出する。[PhP]: Maurice Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception* [1945], Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1998(モーリス・メルロ＝ポンティ『知覚の現象学』1 / 2 [1967 / 74年] 竹内芳郎、小木貞孝他訳、みすず書房、1997 / 1999年); [Steinfeld 1927]: Julius Steinfeld, „Ein Beitrag zur Analyse der Sexualfunktion“, *Zeitschrift für die gesamte Neurologie und Psychiatrie*, Berlin, Julius Springer, 1927, p. 172-183; [Binswanger 1935]: Ludwig Binswanger, „Über Psychotherapie“, *Der Nervenarzt*, Berlin, Julius Springer, 1935, p. 113-121 / p. 180-189(ルートヴィッヒ・ピンスワンガー「精神療法について」、『現象学的人間学』所収、荻野恒一訳、みすず書房、1967年、180-215ページ)。

² フロイトによる幼児のおしやぶりの例を参照。Cf. Sigmund Freud, „Drei Abhandlungen zur Sexualtheorie“ [1905], *Werke aus den Jahren 1904-1905*, GW Bd. V, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1981, p. 80-81(ジークムント・フロイト「性理論のための三篇」、渡邊俊之訳、フロイト全集6、岩波書店、2009年、230-234ページ)。

³ S. Freud, „Zur Einführung des Narzißmus“ [1914], *Werke aus den Jahren 1913-1917*, GW Bd. X, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1981, p. 140-141(フロイト「ナルシズムの導入にむけて」、立木康介訳、フロイト全集13、岩波書店、2010年、120ページ)。

⁴ 近年の最も優れた研究はエティエンヌ・バンブネの試論(cf. Etienne Bimbenet, *Nature et humanité. Le problème anthropologique dans l'œuvre de Merleau-Ponty*, Paris, J. Vrin, 2004, p. 116-126)である。この試論は、『知覚の現象学』におけるメルロ＝ポンティの精神分析に対する立場を、『行動の構造』(1942年)との対比から明確に論じている。しかし、議論の比重は失声現象における患者の「暗示症(pithiatisme)」に傾けられており、本稿が提起する問題(性の脱中心化)は十分に論じられていない。

⁵ Kurt Goldstein, „Über Zeigen und Greifen“ [1931], *Selected Papers / Ausgewählte Schriften*, The Hague, Martinus Nijhoff, coll. « Phänomenologica » 43, 1971, p. 263-281; PhP, p. 132-137 / p. 196-201。

⁶ K. Goldstein, „Über Zeigen und Greifen“, art. cit., p. 269-270。

インフェルトが伝えるには、シュナイダーの性的機能そのものは破壊されていない。性的な興奮、ペニスの勃起、性的交渉の遂行、射精および夢精は、外部から長時間にわたり強度の刺激が与えられるという条件で、損傷後の彼の生活でも維持されている(Steinfeld 1927, p. 176-177)。反対に、性的機能が作動するプロセスにシュナイダーが顕著な障害を抱えていることは、次のインタビューから明らかである。[[シュタインフェルト:]抱擁はどんなことを意味しますか。[シュナイダー:]女性を腕に巻きつけることです[...]。[シュタインフェルト:]あなたは何を感じますか。[シュナイダー:]ある物体(Körper)が、どうやら私の傍らにあるのだと感じます。[シュタインフェルト:]その時、あなたは何を思っていますか。[シュナイダー:]どうして刺激が起きないのか、もっと早く、長時間、刺激が起こればいいのと思っています](Steinfeld 1927, p. 176)。異性が彼に触れると、彼は最小限の興奮を体感する。反対に、彼の方から女性という存在を意識する場合に、この種の能動的な作業はいかなる性的興奮も喚起しない。腕のなかにいる女性は、シュナイダーにとって、近くにある一つの「物体」、もしくは自分の身体に巻きつける対象の域を出ない。さらに、そこで知覚される対象は、異性の「衣服」、「髪」、「胸」(Steinfeld 1927, p. 175)、等々にとどまる。

異性との親密な接触はシュナイダーの性的欲望を発動することがない。シュタインフェルトはこの種の行動障害を、性的不能と早急に結論づけるのではなく(Steinfeld 1927, p. 179)、諸感覚の統合度の問題から考察している。「ところがわれわれが経験したのは、次のような事柄である。著しく強力な身体上の接触[この文脈では性感帯への刺激]も、彼においては、何か漠然としたものに対する曖昧な感情と知を刺激するだけである。この漠然としたものは、性的交渉の本質的な行為を始動させることができない」(Steinfeld 1927, p. 180)。性的な交渉における各刺激はシュナイダーにとって「漠然としたもの」にとどまり、それ以上の感情を喚起しない。ここからシュタインフェルトは性的交渉が可能となる条件を提示する。つまり、性的な交渉は、刺激から生じた諸感覚が統合され、一つの「状況(Situation)」(Steinfeld 1927, p. 182)へと変換された時に可能となるのである。シュナイダーの性的行動の障害は、性的不能や、性欲の有無という事態から論じられるべき問題ではない。むしろ刺激から生まれた諸感覚が、欲望を発動させるような一つの「状況」に変換されない事態を提示しているのである。

1-2 エロス知覚

『知覚の現象学』におけるメルロ=ポンティは、「知覚」という行為からシュナイダーの行動障害を説明している。この文脈において問題となる「知覚」を、彼は「エロス知覚(perception érotique)」(PhP, p. 182 / p. 259 ; p. 183 / p. 260)と呼ぶ。この特殊な知覚の構造を彼は次のように説明している。

エロスないしリビドーが存在しなければならない。両者は元の世界

を活性化し、外部からの刺激に、性的な価値ないし意味を与え、各々の主体のために、客観的な身体の用い方を描き出す。シュナイダーにおいて変質したのは、まさにエロス知覚、もしくは経験の構造そのものなのだ(PhP, p. 182 / p. 258-259)。

この説明によると、性的な行為を遂行する主体は、最初に、外部からの刺激を通じて対象を知覚する。この段階で問題となる知覚は「客観的な知覚」(PhP, p. 182 / p. 259)である。「エロス知覚」が発動するのは、客観的に知覚された対象に、「意味」ないし「価値」が生じる段階である。この段階において、確かに主体は対象を「知覚」している。しかし、この時の知覚行為は「エロス」もしくは「リビドー」によって特徴づけられている。こうした特殊な力に導かれた知覚行為のなかで、主体は、知覚対象に、性的な「価値」および「意味」を付与する。そして、当該の対象に対する身体上での姿勢や態度(「身体の使用法」)が形成される。

このように、メルロ=ポンティは、フロイトが言う意味での「リビドー」および「エロス」を重要視している。ただし、彼の両概念に対する見解は、以下の二点において、フロイトの学説と大きく乖離している。1) まず、メルロ=ポンティの「エロス知覚」に関する議論は、異性愛(シュナイダーと異性の性的交渉)を前提としており、欲望の同性愛的な側面も提示する、フロイトの議論とその射程を狭めている⁷。2) 次に、エロスの考え方について両者の見解は異なる。フロイトは「快原理の彼岸」のなかで、二種類の欲動を提示している。一方は、「生の欲動」であり、もう一方は、「死の欲動」である。前者は、自己保存の欲動であり、後者は、個体が自らの生命を破壊しようとする、一種の退行現象である。両者は「二元論的」な対立のなかにある⁸。エロスは、個体が外部からの破壊に対して自らの生命を維持しようとする働きを指示している⁹。この自己保存の運動は、フロイトは必ずしも明示的に主張していないものの、今日の一般的な見解では¹⁰、「生の欲動」の側に属すると考えられている。メルロ=ポンティは、知覚行為に「エロス」的な特徴を付与することで、主体が、「生の欲動」という枠組みのなかで、知覚された対象に独自の「価値」や「意味」を付与する事態を提示している。他方で、彼は、「死の欲動」には言及しない。つまり、彼は、フロイトの二大欲動論の一部分だけを援用しつつ、性に関する議論を行っているのである。

それでは、「エロス知覚」という概念には、どのような意義があるのだろうか。メルロ=ポンティによると、エロス知覚と、そこで形成された「意味」が位置付けられる状況は、「情動的」(PhP, p. 183 / p. 260)な

⁷ 例えば、フロイトは、ドーラの症例(ヒステリー)分析のなかで、彼女が従姉妹の胃痙攣を模倣(同一化)する事態から、彼女が同性性に向ける欲望を提示している。Cf. S. Freud, „Bruchstück einer Hysterie-Analyse“, *Werke aus den Jahren 1904-1905*, op. cit., p. 241 (フロイト「あるヒステリー分析の断片[ドーラ]」、渡邊俊之、草野シュワルツ美穂子訳、フロイト全集6、前掲書、99ページ)。

⁸ S. Freud, „Jenseits des Lustprinzips“ [1920], *Jenseits des Lustprinzips / Massenpsychologie und Ich-Analyse / Das Ich und das Es*, GW Bd. XIII, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1976, p. 55 (フロイト「快原理の彼岸」、須藤訓任訳、フロイト全集17、岩波書店、2010年、108ページ)。

⁹ S. Freud, *ibid.*, p. 57 (同訳書、110ページ)。

¹⁰ ジャン・ラプランシュとジャン=ベルトラン・ポンタリスの『精神分析用語辞典』を参照。Cf. J. Laplanche et J.-B. Pontalis [1967], *Vocabulaire de la psychanalyse*, sous la direction de D. Lagache, Paris, PUF, 2007, p. 372.

状況から「イデオロギー的」(*ibid.*)ないし「宗教」(PhP, p. 183 / p. 261)的な状況までを包括する。つまり、エロス知覚による意味や価値の形成は、対人関係や対象関係における気分や情緒の発生から、政治思想(「イデオロギー」)の構築や宗教観念の成立にまで及ぶのである。このことは、シュナイダーの行動障害から明らかである。

シュナイダーは、一般的には、もはや情動的ないしイデオロギー的な状況のなかにいないのと同様に、性的な状況にもはや自分を位置づけることもできない。彼にとって、諸々の顔つきは、もはや共感をそそるものでも、反感を覚えるものでもない。[...]太陽や雨は、陽気なものでも、悲しいものでもない。気分は、要素的な器質上の機能だけに依拠しており、世界は、情動的な面では、中性的なものである。[...]彼は政治や宗教について考えることができるようになりたいが、それを試みることはない[...] (PhP, p. 183 / p. 260-261)。

この説明を見てみると、シュナイダーの行為が「客観的な知覚」にとどまっていることは明らかである。確かに、シュナイダーの性的機能は客観的には維持されている(Steinfeld 1927, p. 176-177)。彼は対面する女性の衣服、髪の色、等々を知覚することができる。ところが、次の段階において、「エロス知覚」が発動されない。ゆえに、上記の引用によると、シュナイダーの意識と身体は、客観的な状況から「性的な状況」へと移ることができないのである。他方で、性生活の外部においても、他人は表情(「共感」/「反感」)を持たず、天候は彼の気分(「陽気」/「悲しい」)を左右することがない。さらに、彼は政治や宗教にまつわる事柄から、自らに固有の考えを獲得することもできない。

このように、メルロ=ポンティは、性とその衝動の根源的な側面(「生の衝動」と「死の衝動」)よりも、それが、主体の外部世界との関係に及ぼす様々な効果(気分の発声、政治イデオロギー、宗教思想の構築、等々)に注目している。このことは、性が、現実の生活における諸活動の展開にとって、「生の根」(PhP, p. 184 / p. 261)として機能していることを意味している。メルロ=ポンティは、「死の衝動」と「生の衝動」という区分よりも、エロスもしくは「生の衝動」が、主体の自己愛に還元されず、その現在の行動、もしくはその外部世界との関係にどのように分節されるかに関心を持っていたことが理解される。

2

性と身体:失声の現象学的解釈

2-1 身体的態度としての性

それではいかなる理由から、メルロ=ポンティは、「性」を敢えて主題として論じるのか。彼は精神分析を以下のように定義しており、そのなかに彼が性を論じるモチーフが確認される。「フロイトによる原則上の声明がどのようなものでありえたにしても、精神分析の探求は、実際のところ、人間を性の下部構造のなかで説明することにはならない。むしろ、意識上の関係や態度とかつては看做されていた諸々の

関係や態度を、性のなかで発見し直すことになるのだ」(*ibid.*)。精神分析の目的は、性的行為や傾向のなかで示唆される人間同士の「関係」および身体の「態度」を抽出することにあるとメルロ=ポンティは主張している。人間の「世界に対する在り方、つまり、時間および他の人間たちに対する在り方」(PhP, p. 185 / p. 262)を探求する上で、精神分析は有効な方法となるわけである。

こうした定義づけは、フロイトの性理論と齟齬をきたしている。最初に見たように、フロイトは、性が人間の諸活動のなかでも最も根源的な活動であると主張している。幼児期の性的な欲望は意識下に抑圧され、神経症の病因となる。そして、その病因を特定する作業が治療活動となる¹¹。これに対して、「全ての神経症の起源には性的症状がある。ところが、これらの症状は、しっかりと読み解いてみるなら、征服的な態度にせよ、逃避的な態度にせよ、そっくり一つの態度を象徴化している」(*ibid.*)とメルロ=ポンティは言う。性およびそこから生まれる欲望が抑圧され病因となるプロセスよりも、抑圧された性的欲望が神経症という形で主体の生活上に顕現する過程において、主体が他者および世界に対して身体上でどのような「態度」を取っているかをメルロ=ポンティは重要視していることが理解される。

2-2 失声現象

こうした間主観的な視点から、メルロ=ポンティは、ビンスワンガーが治療にあたった失語症の女性に注目している。彼女は、5歳の時に大きな地震を体験する。以後、不安に苛まれ、悪夢を繰り返し見る。18歳の時に、今度は小規模の地震に遭い、パニックから失声状態に陥る。この時期、厳格な母親がボーイフレンドとの交際を禁止する。ビンスワンガーの患者になる二年前の24歳の時、生理期間中に、頭痛、味覚喪失、吐き気を伴うしゃっくりの発作を起こす。続く生理期間中に、失声¹²が彼女の生活に症状として定着する(Binswanger 1935, p. 118 / p. 191-192; PhP, p. 187 / p. 265-266)。彼女は失声状態に対して「うらわしき無関心」¹²(Binswanger 1935, p. 115 / p. 185)を示しており、症状はヒステリー性のものであるとビンスワンガーは指摘している。治療から数ヶ月後、失声は沈静化し始める。沈静化の要因は、彼女が母親に反抗し、ボーイフレンドとの交際禁止を破ったことに端を発する。同時に、両親も二人の若者の交際を認めるようになる。ビンスワンガーは、この治療の過程を「社会精神療法」(Binswanger 1935, p. 118 / p. 192)と呼ぶ。すでに固定されていた親子関係(禁止する母親とそれを耐える娘)に、新たな要素(この文脈のビンスワンガーの用語で「抵抗」)を「介入」させることで、社会生活における対人関係が更新される(Binswanger 1935, p. 118-119 / p. 192)。関係の変容に伴い、症状は沈静化したのである。

メルロ=ポンティは、失声から治癒に至る過程(社会精神療法)だけではなく、失声という現象に備わる意味に注目している。「厳密にフロイト流の解釈をするならば、性の発展の口唇期段階が問題とされるは

¹¹ S. Freud, „Drei Abhandlungen...“, art. cit., p. 139-140(同訳書、304ページ)。

¹² 精神医学フランス学派の用語。ヒステリー患者の世界や他者への無関心は、重度の人格障害に由来するものではないことを、この用語は指し示している。「精神療法」の日本語訳注(215ページ)を参照。

ずである。ところが口に『固着』しているものは、性的な存在のみならず、より一般的には、他者との関係である。発話はその関係の伝達手段である」(PhP, p. 187 / p. 265-266)。精神分析の視点からヒステリー性の失声を解釈するならば、彼女の口唇期における性的欲望の抑圧が問題とされるはずである¹³。上記の引用において、メルロ=ポンティは、失声は、器質上の一症状を超えて、ある一定の対人関係(「他者との諸関係」)を含意していると主張する。失声は、発話能力の喪失だけでなく、対人関係の手段の放棄も示唆している。つまり、家族の構成員との「共存の拒否」(PhP, p. 187 / p. 266)を意味しているのである。味覚の喪失、食欲の減退、吐き気も家族との関係を暗示している。「患者[失声に陥った女性]は自分に下された禁止を、文字通り、『呑む(avalier)』ことができない」(ibid.¹⁴)。飲食にまつわる諸症状は、母親に対して直接表明できないものの、それでも断念されず意識下で保持されている彼女の反抗心を翻訳しているのである。

メルロ=ポンティは、以上のように、精神分析的な視点よりも精神病理学的な視点に依拠して議論を進めている。しかし、このことは前者の否定を意味してはいない。患者の幼児期(口唇期)の性的傾向とその抑圧から失声の症状を説明する立場を、確かに、彼は回避している。ところが、「諸症状の性的な意味[口唇期における性的傾向とその抑圧]を通じて、透かし模様のように浮き出して見えてくるものは、過去と未来、自我と他者、つまりは実存の根本的な諸次元との関係において、諸症状がより一般的に意味しているものである」(PhP, p. 188 / p. 266)とも言っている。この指摘によると、症状から示唆される「性的な意味」は、患者の生活に固有の時間構造(「過去」と「未来」)と対人関係(「自我」と「他者」)を垣間見させる。ここで問題となる時間性は、抽象化された時間性である。「[...]共存関係を断ち切った患者は[...]例えばカレンダーによって未来を抽象的に理解できている」(PhP, p. 191 / p. 270)。愛する者との関係が絶たれた事態は、患者にとって、未来がなくなった事態を意味している。未来に起こる出来事は、もはや患者の実生活に、具体的にイメージできるような形で、組み込まれていない。ゆえに、未来は、外的な手段(「カレンダー」)に訴えることのみ、予見される。性的な傾向とその抑圧が、患者の生活に固有の歴史(「リビドーの歴史」、PhP, p. 188 / p. 266)を垣間見させる点において、メルロ=ポンティは精神分析の視点を評価していることが理解される。

2-3 身体の収縮と膨張

性とその衝動の水準における主体と外部世界の関係に注目すると同時に、メルロ=ポンティは、「身体」を人間の実存構造の基盤に定位しつつ、議論を進めている。人間の身体を物質から機能上で区別するために、ビンズワンガーは前者を「生き生きとした身体(Leib)」(Binswanger 1935, p. 115 / p. 185)と規定する。失声においてそうであるように、言語、発話、記号、等々を媒介とした表現が不可能となった後、この「身体」は、症状(「失声」という形で何かを表現(家族との共存

の拒否)しようとする。「人間存在は、なお何かを表現する」(Binswanger 1935, p. 181 / p. 199)のである。この極めて非言語的な表現を、ビンズワンガーは「身体言語」(ibid.)と呼ぶ。疾病時の「身体言語」の特徴は、健常時における身体言語のそれと大きく異なる。なぜなら「生き生きとした身体は、ここでは、『単独で作動』し続けている」(Binswanger 1935, p. 182 / p. 200)からである。言語と記号が、失声に伴い、機能不全となった。この時に、これらが本来は担うべき表現活動までもが、身体言語に課せられることになる。病的な場面における「身体言語」は、他のあらゆる種類の表現活動を過度に引き受け、孤立した表現活動を意味している。ビンズワンガーは、この水準における患者の存在様態を「純粋に身体的な生」(Binswanger, 1935, p. 185 / p. 206)と呼ぶ。

ビンズワンガーの身体論を参照しながら、メルロ=ポンティは人間の身体運動に備わる二種類の運動性を提示している。第一の運動は、「収縮(systole)」(PhP, p. 192 / p. 272)と呼ばれる。

実際に、一方では、それ[身体]は、私の実存にとっての可能性のことである。その可能性とは、私の実存が自らを断念し、無名で受動的となり、スコラ学のように自らを固定する可能性のことである。先に語った患者[失声の女性]において、未来、生き生きとした現在、あるいは過去へと向かう運動や、学習し、成熟し、他者との交流へと入る能力は、身体症状のなかで動かなくなり、実存は縛りつけられている(ibid.)。

収縮の現象は、上記の引用が示しているように、身体運動の可能性(「学習」、「成熟」、「他者とのコミュニケーション」)が、極限まで機能不全となった状態を示している。すでに見たように、疾病に伴い、患者の時間構造は変容する。このことは、時間の各局面(「生き生きとした現在」、「過去」、「未来」)が、身体行動上で正常に分節されなくなった事態を意味している。これに伴い、患者は、身体の諸活動が、自分のものである感覚を失う。身体的人格的な特徴が希薄になることで、身体は、患者にとって、「無名」で「受動的」な存在となるのである。メルロ=ポンティが「収縮」と名づける身体運動は、身体が他のあらゆる諸活動から孤立した状態を提示している点において、ビンズワンガーが「純粋に身体的な生」と呼んだものと概念上で対応することが理解される。

第二の特徴は「膨張(diastole)」(ibid.)と呼ばれる。「私が自分の身体に没入する場合に、私が見ることができるものは、諸事物や他の人間たちの感覚可能な外皮だけである。諸事物そのものは非現実によって捕えられており、諸々の行動は不条理なものへと分解される。現在は、誤認においてそうであるように、自らの一貫性を失い、永遠へと転化する」(PhP, p. 193 / p. 274)。言語、思考が機能しなくなり、主体の生活が、身体上の生活に切り縮められた場合に、外部の諸事物は、抽象的な存在(「外皮」となる。ところが、メルロ=ポンティが指摘す

¹³ 実際に、フロイトは、口唇領域とヒステリー性の摂食障害の関係を指摘している。「そこ[[口唇領域における性源的な意味合い]]に抑圧が働いた場合、その子は、食べることに嫌悪したり、ヒステリー性の嘔吐を起こしたりする」(S. Freud, „Drei Abhandlungen...“, art. cit., p. 83(「同訳書」、233-234ページ))。

¹⁴ 「呑む」はビンズワンガーの表現。Cf. Binswanger 1935, p. 182 / p. 200。

3-1 実存

るには、この水準における「身体」は、外部の諸事物と同じように、物質および外皮に必ずしも還元されない。

私に加担することはないが、私を通じてほとぼしる身体的実存は、世界に対する、ある真の現前の粗描にすぎない。この実存は、少なくとも、その可能性の基礎となっており、われわれと世界の最初の契約を確立する。確かに、私は人間の世界から身を引き、人格的な実存を放棄できる。ところが、そうしたことは、私を存在へと運命づけるが、今度は、名を持たない同じ潜在的な力を、私の身体うちに再度見出すためにすぎないのである (*ibid.*)。

行動主体が世界や他者との交流から身を引くとしても、当該の「身体」は物質に還元されないことをメルロ=ポンティは主張している。なぜなら、身体は、行為主体の意志や注意が介入しない水準においても、自ずから外部の世界とある一定の関係(「世界との最初の契約」)を確立しようとするからである。この水準における「身体」は、自我存在の諸特質が介入していない以上、「無名」(「名を持たない」)の身体である。ここで問題となる身体の非人称的な側面は、「収縮」におけるそれと位相が異なる。後者は主体の活動のあらゆる可能性が断念された場面における身体の状態を指示している。これに対して、前者は、主体と外部(世界および他者)の関係の端緒(「世界との最初の契約」)として機能している。

この「膨張」の運動は、失声に陥った患者が声を取り戻す契機として機能する。「記憶や声を取り戻されたのは、身体が他者ないし過去へと新たに開かれた時、身体が共存により貫かれるがままとなり、身体が(能動的な意味で)新たに自分自身の彼方に意味付与を行うようになった時である」(PhP, p. 192 / p. 273)。名を持たない身体が、最初に、外部の世界と最小限のつながり(「世界との最初の契約」)を確保する。次いで、この「身体」は、膨張の運動を繰り返し、行為主体に備わる諸特質(「過去」、他者との「共存」)を外部的世界に関係させるわけである。失声時の対人関係(禁止する母親/言語を拒む娘)が、新たな関係(交際を認める母親/言語を取り戻す娘)へと更新されるのは、この意味において、身体が「膨張」の運動を再開した時である。ピンスワンガーが「社会精神療法」と呼んだ治療法を、メルロ=ポンティは、身体が自発的に「膨張」する運動から説明していることが理解される。

メルロ=ポンティによる失声現象の解釈から、以下の二点が提示される。1) 患者の時間性、つまり生活史(「リビドーの歴史」、PhP, p. 188 / p. 266)の構造上の変化を開示する点において、彼は、性とその衝動を重要視するフロイトの学説にある一定の理解を示している。2) 患者の器質上の問題に含まれる性的な特徴そのものではなく、そこから生まれる身体行動を、彼は主要な分析対象としている。患者の身体の非正常な側面(「収縮」)と健常な側面(「膨張」)が問題とされているのである。

二つの症例(高次脳機能障害とヒステリー性の失声)の分析において、メルロ=ポンティは、性から生まれる衝動そのものよりも、そこで分節される対象関係および対人関係、さらには、身体の機能に注目していた。しかし、このことは、精神分析が提示する「性」という概念の否定を必ずしも意味してはいない。実際に、「性的存在としての身体」の後半において、彼は、人間の活動の周縁に位置する性が、人間の存在構造(「実存」と極めて密接な関係を備えていることを主張している。

ここで用いられる「実存」という概念を最初に検討してみたい。メルロ=ポンティは、この概念を次のように定義している。「実存は(心的な諸事実のような)諸事実の序列ではない。他の諸事実に戻元されたり、他の諸事実がそこに還元されるような諸事実の序列ではない。実存は、諸事実の交流の曖昧な中間地点であり、それらの境界がぼやける地点であり、さらには、それらに共通する横糸である」(PhP, p. 194 / p. 275)。感覚、想像、表象、思考、認識、判断、等々——これらの様々な行為が、現実に遂行されているという「諸事実」から、人間の「実存」は構成されている。上記のメルロ=ポンティの指摘によると、これらの「諸事実」は、例えば、感覚と想像が低次の行為で、認識と判断が高次の行為、というような形で明確に序列化されているわけではない。むしろ、彼が主張するには、各事実は、「実存」という枠組みのなかで、互いに自由に位相を変えるのであり、質的な差異は必ずしも明確とならない。つまり、「実存」は人間の諸活動の「曖昧な中間地点」として機能しているのである。このことをメルロ=ポンティは、他人に身体を晒す経験から説明している。

[...]身体を有している限りにおいて、私は、他者のまなざしの下で、対象へと還元されるし、彼にとって、人格とみなされうることはない。あるいは逆に、私は彼の主人となり、今度は彼をまなざすことができる。ところが、このような他者の支配は袋小路である。というのも、私が持つ価値が他者の欲望により承認された瞬間に、他者は、私が認められるのを願っていたような人格ではなくなるからである。それは自由なき魅了された一存在であり、その資格において、もはや私に関わることもない(PhP, p. 194-195 / p. 276)。

自己の身体が他者のまなざしに晒された時、自己は羞恥の感情を抱く。なぜなら、その時の身体は他者のまなざしに従属しており、自己の意識がもはや十分に把握できない一つの「対象」に変容しているからである。逆に、自己が他者の身体のみに関心を向ける場合に、自己は他者の人格を否定し、彼の身体を物質として扱うことになる。上記の引用において、メルロ=ポンティは、こうした支配と従属が備える矛盾(「袋小路」)を指摘している。自己は、他者の存在と人格を支配する

ために、他者をまなざし、その身体を「対象」のように扱う。ところが、他者を支配した後に獲得されるものは、彼の「人格」ではない。なぜなら、自己が他者をまなざした瞬間に、他者は一つの人格から「対象」へと位相をすでに変えているからである。

見ているという事実が、見られているという事実に変更され、支配を完了したという判断が、その挫折の感情へと切り換わる。「実存」に立脚した諸活動は、このように極めて逆説的な仕方、自ずから位相を変える。つまり、これらの諸活動は、認識論的な枠組みにおいて、「主体」ないし「客体」にもなれば、対人関係の枠組みにおいて、「主人」ないし「奴隷」(PhP, p. 195 / p. 276)にもなりうるのである。

ジャン=ポール・サルトルは、欲望の「挫折」という視点から実存の諸活動を論じた¹⁵。こうした否定的な見解に対して、「性的存在としての身体」におけるメルロ=ポンティは、実存に立脚した諸活動が、ある一定の序列に収まることなく、自由に変化する事態そのものをより重要視している。「実存はその根本的な構造からして、それ自体において不確定なものである。実存は作動そのものであり、その作動により、意味を持っていなかったものは一つの意味を持つようになり、性的な意味はより一般的な意味を持つようになる。[...]この限りにおいて、実存は不確定なものである」(PhP, p. 197 / p. 279-280)。「実存」に立脚した人間の諸活動において、それまで意味を持っていないように見えた一つの所作が、意味を持った行為に変換される。極めて性的なニュアンスを帯びた行為が、全く別の特徴を備えた行動へと位相を移す。「実存」という概念を提示することで、メルロ=ポンティは、極めて偶然で、恣意的に見える一つの行為が、さらに別の特徴を帯びた行為に変換される事態を記述しているのである。こうした事態をメルロ=ポンティは、「偶然性の必然性への変化」(PhP, p. 199 / p. 281)と呼び、「実存」という概念に関して、サルトルの否定的な見解とは異なる観点を提示する。

3-2 雰囲気としての性

この「実存」という人間の存在構造に、性は密接に結びついている。「[...]実存が性のなかに拡散しているなら、相互的に、性も実存のなかに拡散している」(PhP, p. 197 / p. 279)とメルロ=ポンティは両者の密接な関係を主張している。

それでは、性とその衝動は、どのような形で実存と関わるのか。メルロ=ポンティは次のように答えている。「性は人間の生活のなかでは、乗り越えられないものであるが、無意識表象により、その中心部に形作られたものでもない。それは一つの雰囲気のように人間の生活に現前している」(PhP, p. 196 / p. 278)。性は、人間の諸活動の中心部に位置することはなく、それでも、人間はそれを無視することはできない。つまり、性は、人間の諸活動の周辺にある種の「雰囲気」のように介入することをメルロ=ポンティは主張しているのである。

性を「雰囲気」と考えるメルロ=ポンティの視点は、フロイトの夢理論

への批判から導出される。『夢解釈』におけるフロイトは、覚醒時には抑圧されている様々な欲望が、夢においては、抑圧を免れ、擬似的に実現されると主張する¹⁶。この擬似的な欲望の成就を記述するために、彼は、夢を「潜在的な内容」と「顕在的な内容」に分類する。前者は、夢のなかで現れる欲望の全体を表している。後者は、この全体が「圧縮」された姿であり¹⁷、夢を解釈する糸口となる。後者の背後に隠された「夢思想」の解説を通じて、前者は解釈される。これにより、病因の手がかりが分析者に与えられる。メルロ=ポンティは「夢を見ている者は、まずは夢の潜在的な内容を思い描く[自らに対して表象する(*se représenter*)]のではない。つまり『二次的な物語』によって、適合したイメージの助けを借りることで、明るみに出るような潜在的な内容をまずは思い描くのではないのである」(*ibid.*)とすることで、フロイトの夢理論(潜在的な内容/顕在的な内容)を批判している。夢の潜在的な内容が、顕在的な内容の解説を通じて、解釈され、主題として表象されるプロセスをメルロ=ポンティは批判しているのである。

この批判は、性が、覚醒時の主体の生活のなかで表出するプロセスに関する、フロイトとメルロ=ポンティの見解の相違を示している。前者は、夢の顕在的な内容の解説を通じた潜在的な内容の解釈という方法を提示した。これに対して、後者は、性の表出を、性=雰囲気という枠組みのなかで説明している。

夢見る人に関して、われわれが語ったことは、われわれが自分の表象の手前で感じている、あのわれわれ自身のいつもまどろんでいる部分、あの「個人的な霧(*brume individuelle*)」に関しても当てはまる。この霧を通じて、われわれは世界を知覚している(*ibid.*)。

覚醒時の主体は、自らの存在と周囲の世界を隈なく思い描くことができるような形で、目覚めているわけではない。むしろ、覚醒時の生活のなかにも、表象機能の及ばない「部分」が存続し、それが、主体の知覚行為を「霧」のように取り巻いているとメルロ=ポンティは主張している。主体の知覚行為は、この漠然とした「雰囲気」を経由した上で、遂行されていることが理解される。そして、メルロ=ポンティは、この「部分」にこそ、性は定位されると指摘する。

そこ[覚醒時の主体のまどろんでいる部分]には、混濁した諸形式や特権化された諸関係があり、これらは少しも「無意識的」なものではない。これらの形式や関係について、われわれは次のことをしっかりとわかっている。それらは、ぼやけていて、性をはっきりと呼び起こしてはいないが、性と関連があることを。性がより特別な形で宿っている身体から、性は香りや音のように放射的に広がるのだ(*ibid.*)。

¹⁵ Jean-Paul Sartre, *L'être et le néant. Essai d'ontologie phénoménologique* [1943], Paris, Gallimard, coll. « Tel », 1996, p. 437-438.

¹⁶ S. Freud, *Die Traumdeutung* [1900], GW Bd. II/III, Frankfurt am Main, S. Fischer, 1976, p. 140(フロイト『夢解釈』新宮一成訳、フロイト全集4、岩波書店、2007年、181ページ)。

¹⁷ S. Freud, *ibid.*, p. 284-285(この部分の全集版邦訳は未公開)。

ルロ=ポンティは性=雰囲気という考えから提示しているのである。

結論：性の脱中心化の位相

「性的な存在としての身体」におけるメルロ=ポンティは、性の根源的な側面そのものよりも、そこで形成される主体と外部世界の関係と、その時の「身体」の機能を重点的に考察している。この点において、彼は、性とその衝動を人間の諸活動の中心から段階的に外し、対人関係および知覚行為の基盤となる「身体」を考察の中心に移していることが理解される。他方で、彼が、性という概念そのものを否定していないことも確認される。なぜなら、彼は、性を、人間の諸活動を取り巻くある種の「雰囲気」(「霧」)と考え、重要視しているからである。

人間の諸活動の中心から性を外し、身体を考察の中心に定位する彼のスタンスは、フロイトが性に関して提示した諸概念(リビドー、「生の欲動」と「死の欲動」)の一般的な理解と明らかに齟齬をきたしている。ところが、それは、精神分析の様々な学派のなかでも、とりわけ「身体」の機能を重要視するシルダーの立場に近いと言うこともできる。実際に、『知覚の現象学』以後も、メルロ=ポンティは、性的な現象および病理的な現象を分析する際に、シルダーの「身体図式」を援用している¹⁹。この意味において、精神分析の性に関する知見から示唆される身体概念は、メルロ=ポンティのみならず、現象学における身体概念を考察し直す機会となる。精神分析における「身体」という概念をより深く考察し、それを現象学にフィードバックする作業が論者の次の課題である。

覚醒時の主体の諸活動が、主体の表象機能が及ばない「まどろんでいる部分」のなかで、すでにある一定の形(「形式」となっている事態をメルロ=ポンティは提示している。主体の知覚行為や他者との関係は、この極めて漠然とした「部分」の水準で、すでに形成されているのである。この「部分」は、上記の引用によると、性そのものではないものの、主体の性的な特徴を含意している。このように、性とそこから生まれる衝動は、覚醒時の主体が表象することはできない、自らの生の「霧」の部分に位置づけられる。そして、両者は、覚醒した意識によって明示的な形で表象はされないものの、主体の諸活動を常に取り巻いているのである。

上記の引用によると、主体の諸活動を取り巻く性は、表象機能ではなく、身体運動を通じて、外部に表出する。主体の性的傾向は、当の主体の「身体」が形成する姿勢や態度から、極めて自然に——「音」や「香り」のように——、表出しているのである。このことは、身体が、主体の意志や注意が介入する以前に、すでにある一定の姿勢や態度を取っていることを示している。運動主体の意識下に抑圧されている性は、姿勢や態度の形成を通じて、自ずから表出するのである。メルロ=ポンティは、この非意図的な姿勢や態度の形成を、ポール・シルダーに倣い、身体行動の図式化(「身体図式」¹⁸、cf. PhP, p. 196 / p. 278)と呼ぶ。行動主体の意識の及ばない水準において、行動が図式化されていることにより、主体に備わる性的な特徴や傾向は、「香り」や「音」のように、極めて自然に表出するのである。

この点において、性は実存に立脚した諸活動とある一定の関係を備えていることが理解される。「[...]性は、明確な意識作用の対象とはならないものの、私の経験の特権化された諸形式の動機となりうる。このように捉えられるなら、つまり両義的な雰囲気として捉えられるなら、性は生と共通の外延を備えている」(PhP, p. 197 / p. 279)。確かに、性とその衝動は、もはや人間の生と存在構造(「実存」)の中心には位置していない。ところが「雰囲気」という極めて微細な形で、それは人間の諸活動にある一定の特徴を与える。主体が様々な生活の形式のなかから「特権化された諸形式」を選び出す際に、「性」は、その選択行為にある一定のモチーフ(「動機」)を与えるわけである。

最後に、この動機づけの機能を検討してみたい。雰囲気としての性は、主体の行動の「動機」となる。しかし、この「動機」は、メルロ=ポンティによると、必ずしも主体の生を因果的に決定する要因とはならない。なぜなら、動機づけられた活動を遂行している主体は、当該の活動が「性的な動機」(ibid.)に由来するのか、あるいは「他の諸々の動機」(ibid.)に由来するのかを、必ずしも、意識的に判別していないからである。実存に立脚した主体の活動を規定せず、その表象によって把握されることもないが、それでも、その生活に関与し続ける諸要素を、メ

¹⁸ メルロ=ポンティは、この概念を『知覚の現象学』で、頻繁に援用する(cf. PhP, p. 59 / p. 97 ; p. 114 / p. 172 ; p. 165 / p. 238, *et passim*)。「対象としての身体と機械論の生理学」と題された章では、シルダーの身体図式概念を批判的に継承したジャン・レルミットの議論(Jean Lhermitte, *L'Image de notre corps* [1939], préface de Jacques Chazaud, Paris, L'Harmattan, coll. « Psychanalyse et civilisation », 1998)に依拠しつつ、幻影肢の現象を論じている(cf. PhP, p. 95-105 / p. 145-159)。

¹⁹ それぞれ以下の文献を参照。Cf. M. Merleau-Ponty, « Les relations avec autrui chez l'enfant » [1950-1951], *Parcours 1935-1951*, Lagrasse, Verdier, coll. « Filosofia », 1997, p. 176-177 ; *L'Institution. La Passivité. Notes de cours au Collège de France (1954-1955)*, Paris, Belin, coll. « Littérature et politique », 2003, p. 251.